

遊びを生み出す子どもの力①

認定 NPO 法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク
三浦忠士

子どもは他者やその集合である社会、自然といった環境と関わるなかで、新しい遊びを次々と生み出す力にあふれている。新しい遊びを生み出せるということは、そこで味わえる楽しさもまた、新しく生み出せるということである。次々と生み出される新しい楽しさは、日々を生きる糧となり、つらいことや困ったことを乗り越える原動力を子どもにもたらす。私は宮城県の仙台市およびその周辺地域を主なフィールドとして、「プレーリーダー」と呼ばれる子どもの遊び場をつくる仕事にたずさわるなかで、このことを日々感じている。この連載では、私が目の当たりにした子どもの遊びを生み出す力のありようを報告しながら、その意味や可能性について考えていきたい。

なお、この連載で扱われる「遊び」とは、私たち人間が他者に強いられなくても自ずからしてしまう行為、何故かやらずにはいられない行為を指す。例えば鬼ごっこは、一般には遊びとして分類される行為だが、本連載で語られる遊びには該当しないこともある。鬼ごっこをしたくてしたくてたまらない子どもにとっては遊びであるが、いまは別のことをしたい子どもにとっては、遊びではないのである。

これとは逆に、一般には遊びとは見做されない行為が、この連載では遊びとして扱われることもある。例えばふつうは「掃除」と見做されるであろう行為が、子どもたちにとって遊びとなることがある。私は日々の仕事のなかで、アスファルトやコンクリートで舗装された公園の園路に、チョークで自由に落書きできる環境をつくるのがよくあるのだが、最後にデッキブラシと水で原状復帰する際、子どもたちがそれをすすんでやりたがる場合がたまにある。水をかけたりデッキブラシでこすってチョークを溶かし、最後にもういちど水をかけて流すのであるが、その様を面白く感じるらしい。時には1本のデッキブラシを複数の子どもが取り合うほど盛り上がることもあるし、2本のデッキブラシを使ってどちらが広く消せるか競争が始まったこともある。親や学校の先生に言われて嫌々する掃除は言うまでもなく遊びではないが、上記のような行為については、本連載では遊びとして扱う。

今回は、2023年8月27日に仙台市若林区の仙台市立古城小学校で開催された「ふるじろプレーパーク」において、これまで述べてきたような意味での遊びを子どもが他者や社会、自然と関わりながら次々と生み出していった事例を紹介する。プレーパークは、「プレーリーダーや地域の大人等の見守りの中で、子どもが工夫して遊びを作り出す等、自発的に自由な遊びを実現できる場」ⁱとして、仙台市では定義されている。なお、ここで触れられている

プレーリーダーは、同市では「子どもの主体的な遊びを引き出し、見守り、支援するとともに、安全管理の知識をもつ人」ⁱⁱとされている。「ふるじろプレーパーク」では、この役割を開催場所である古城小学校に通う児童たちの保護者有志が担うかたちでスタートした。その児童たちが古城小を卒業し成人した現在も保護者有志は活動を続け、それを筆者の所属する「認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク」(以下「冒険あそび場ネット」と記載)がプレーリーダーを派遣するかたちで支援している。この日は「ふるじろプレーパーク」のプレーリーダー2名に加え、「冒険あそび場ネット」のプレーリーダーとして筆者も参加した。また、「冒険あそび場ネット」のインターン生である大学生も1名活動に参加し、プレーパークの運営にあたった。



この日は32.3°Cの真夏日であったが、古城小学校の児童が20人、その兄弟姉妹の未就学児が3人、保護者2人が遊びに来た。プレーパークは、開催時間内であれば参加する子どもたちがいつ来ていつ帰ってもよいかたちで開催される。「ふるじろプレーパーク」では古城小の全児童に毎月、前回の様子や次回の案内をA4両面1枚にまとめたチラシ「ゆうゆう通信」を配布しており、それを見た子どもたちが開始時間の10:00頃から、三々五々遊びに来る。プログラムは何も決まっていない。「子どもが工夫して遊びを作り出す等、自発的に自由な遊びを実現できる」ようにするため、プレーリーダーが準備した素材や道具のほか、古城小の校庭で手に入る自然の素材も生かしながら、子どもたちは遊びをつくり出していく。

この日は水鉄砲を家から持ってくるなど、水遊びをするつもりで来た子どもが複数いたので、それに応えるかたちでプレーリーダーがプラスチック製の大きな漬物ダルに水を汲み、準備していた10本程度の水鉄砲も出した。小学校の夏休み期間中に開催した前回7月23日の「ふるじろプレーパーク」では、プレーリーダーがブルーシートや木材等を用いて自作したウォーターライダーとプールを設置したこともあり、水遊びが盛況だった。そんなこともあり、今回も水遊びを楽しむつもりで来た子どもが少なからずいたと考えられる。



水遊びは水鉄砲を撃ち合うところから始まった。暑い日だったこともあり、冷たい水に濡

れるのは気持ちいいと感じた子どもが多かったようで、すぐに大勢が集まった。その一方で、ずぶ濡れになりたくない子どもも一定数いて、少し距離をとって他の子どもたちが水遊びを楽しむのを見ていた。その子どもたちは濡れたくはないが水遊びに興味はあったのだろう。水鉄砲の撃ち合いをずっと見ていた。そのうちの一人が、やがて何かを閃いた顔をして、水の貯まっている漬物ダルに向かった。そして水鉄砲に水を入れると、空に向かって水を放ち、「雨が降ってきた！」と笑顔で叫んだ。その子自身は他の子を狙い撃ちしたかったわけではなく、いわば「雨雲ごっこ」とでもいうべき遊びをやりたかっただけのようだったが、近くにいた他の子どもたちは、「わー！」「きゃー！」と声を上げながら、それから逃れた。逃れる子どもたちに嫌がる気配は無く、むしろスリルを楽しんでいる雰囲気があって、こちらはこちらで別の遊びが成立していたようだった。やがてタルの水が無くなると、子どもたちは水遊びを一度やめて、それぞれ別の遊びを始めた。

古城小の校庭には大きな楠の木が立っていて、子どもたちはそこにプレーリーダーがつくるブランコで遊ぶのを楽しみにしている。楠の木の枝のうち太いものを選んで毛布で保護し、そこにロープをかけ、座面に孟宗竹を用いた手作りのブランコである。高い位置にある枝にロープをかけるので振れ幅が大きく、なかなかスリルのあって楽しい。この日も子どもたちのリクエストに応じて、木登りの得意な「ふるじろプレーパーク」のプレーリーダーが、樟の木をあれよあれよという間に登っていき、ブランコを枝にかけ始めた。その様子を子どもたちは興味深そうに見守っていた。やがてブランコができると子どもたちは列をつくり、座面に1~3人ずつ乗って、他の子どもやプレーリーダーに後ろから押しもらったあと前後にこぐ遊びや、他の子どもやプレーリーダーにブランコを回してもらってロープを捻り、回転するといった遊びを楽しみ始めた。



このように人気のブランコに多くの子どもが集まる一方で、別の遊びをしたいと感じている子どももいた。顔見知りの筆者のところへ近づいてきて、「また炭をつくりたい」と伝えた。「炭」といっても木材を不完全燃焼させてつくるものではなく、火がついたあと水に漬けて消火され消し炭となった枝や松ぼっくり、どんぐりのことである。前回7月23日の「ふるじろプレーパーク」で、筆者とともに「炭」をつくって遊んでいたこの子は、よほど面白かったのだろう。真夏日にもかかわらずとてもやりたいようだった。気温が高いので子どもたちは水遊び一択だろうと予想していた筆者たちプレーリーダーは驚いたが、この子が「自発的に自由な遊びを実現できる場」をつくるため、コンロを倉庫から出してきて、準備を手伝った。これを受けてこの子は嬉しそうに駆け出し、校庭で「炭」にするための枝や松ぼっくり、どんぐりを集め始めた。

「炭」の材料が集まり火をつけると、ブランコで遊んでいた子どもたちの一部もコンロに集まってきて、枯れ葉や枝、松ぼっくり、どんぐりをくべ始めた。この子たちは「炭」をつくる遊びではなく、燃えるものを集めて火で燃やす遊びを楽しんでいるようだった。お昼時になると、おやつに持ってきたポテトチップスや煎餅を炙って食べたり、友だちやプレーリーダーに振る舞う子も現れた。割りばしに刺したマシュマロを炙る子どもたちもいた。慣れている子もいればまだ慣れていない子、初めて挑戦する子もいた。慣れている子が先生役になって、慣れていない子や初めての子にコツを教える場面もあった。



お昼を食べたあとも火のまわりから子どもたちがいなくなることはなく、引き続き校庭で拾った自然物を燃やす遊びをしたり、おしゃべりを楽しんでいた。ブランコも午前と同様に人気で、遊ぶ子どもたちの姿は絶えなかったが、やがて子どもたちがそこで新たな遊びを生み出した。ブランコに乗る子どもが「バッター」役となり、「ピッチャー」役の子どもが投げたボールを蹴る遊びが新たに生み出されたのである。プレーパーク開催日直前の8月23日に全国高等学校野球選手権の決勝戦が甲子園球場であり、そこで仙台育英学園高等学校が慶應義塾高等学校と優勝を争っていた。子どもたちのおしゃべりを聞いていると、この出来事がきっかけとなって生まれた遊びのようだった。



仲の良い二人の子どもが始めたこの遊びは、やがて他の子どもたちも混ざってどんどん発展を遂げていった。まず「ランナー」役の子どもが現れ、「バッター」が「ピッチャー」の投げたボールを「ヒット」すると出塁した。そのうち「ベースコーチ」役の子どもも現れ、「バッター」が「ヒット」を放つと、大声をあげて「ランナー」に走ることを促していた。やがて「観客」の子どもたちも集まり、「バッター」が「ヒット」を放つと歓声をあげていた。「バッター」役は「ヒット」が出ると別の子どもに交代するルールが子どもたちによって決められた。「ピッチャー」は、そ



の役をしていた子どもが投げるのに飽きたり疲れたりすると、別の投げたい子どもが交代していた。一般的な野球のようにチーム単位で得点を競うという形にはならず、したがって攻撃側のチームと守備側のチームのチェンジも無かった。「ピッチャー」が投げた球に対するストライクとボールの区別も無かった。「ピッチャー」をした子が次の場面では「バッター」になったり、「バッター」役の順番待ちをしている子が「ランナー」や「ベースコーチ」、「観客」になっていた。「バッター」役になった子どもは、ブランコそのものを楽しみながら、「ヒット」を打つことも同時に楽しんでいるようだった。「ピッチャー」役の子どもは、一般的な野球のように「バッターに打たれないように投げる」ということはせず、「バッター」が「ヒット」を打ちやすい位置にいかに関投げるかを楽しむ、一種の的当て遊びを楽しんでいるようだった。「ランナー」役の子どもは、「ヒット」で飛んでいったボールが返ってくるまでに塁に到達することを楽しむ、一種のタイムレースのような遊びに興じているようだった。「観客」役の子どもは主に「バッター」に、「ベースコーチ」役の子どもは主にランナー役にそれぞれ自己投影して、その活躍を自分ごととして楽しんでいるようだった。

子どもは他者や社会、自然と関わることで新しい遊びを次々と生み出す力にあふれている。今回紹介した事例においては、水鉄砲を楽しむ他の子どもや、自然現象である雨の記憶と関わりながら、「雨雲ごっこ」を生み出している子どもがいた。この子は濡れたくない自分と、水遊びに興味はある自分、双方にも関わるなかで、それほど濡れずに水を楽しめる遊びに行きついたのである。そしてこの遊びは、他の子どもたちのあいだに、「雨雲」から降り注ぐ「雨」から逃げる遊びも生み出すきっかけとしても機能していた。前回のプレーパークで校庭に落ちている枝や松ぼっくり、どんぐりといった自然の素材と関わり、「炭」をつくる遊びを生み出した子どもは、他の子どもが自然物を燃やす遊びや、おやつを炙る遊びを始める起点にもなっていた。友だちや社会での出来事、楠の木に吊るされたブランコと関わりながら、「バッター」や「ピッチャー」になる遊びを生み出した子どももいた。そんな子どもと関わるなかで、「ランナー」や「ベースコーチ」、「観客」になる遊びを生み出した子どももいた。さらにこのような遊びの中で、お互いの役を交換し合いながらそれぞれがしたいことをできる社会性も、子どもたちは発揮していた。

この連載では、このように次々と遊びを生み出す子どもたちの力を引き出し、見守り、支援するプレーパークで筆者が出会った事例を、今後も計6回にわたって報告していく。次回は「冒険あそび場ネット」が仙台市の若林区の公園で2023年11月12日に開催した「久保田東あそび場」にて筆者が出会った、「基地」をつくる遊びを取り上げる予定である。ここでは年上の子どもが始めた遊びが、かたちや内容を変え続けながら年下の子どもたちのあいだで広まり、最終的には双方が交じり合ったかたちで楽しめる遊びとなっていた。

-
- i 『令和5年度 仙台市プレーパーク等運営補助事業募集要項』仙台市、2023年、
<https://www.city.sendai.jp/kodomo-somu/kurashi/kenkotofukushi/kosodate/bosyuu/documents/playparkhojobosyuyoukou.pdf>
(最終閲覧日 2023年11月1日)
- ii 同前